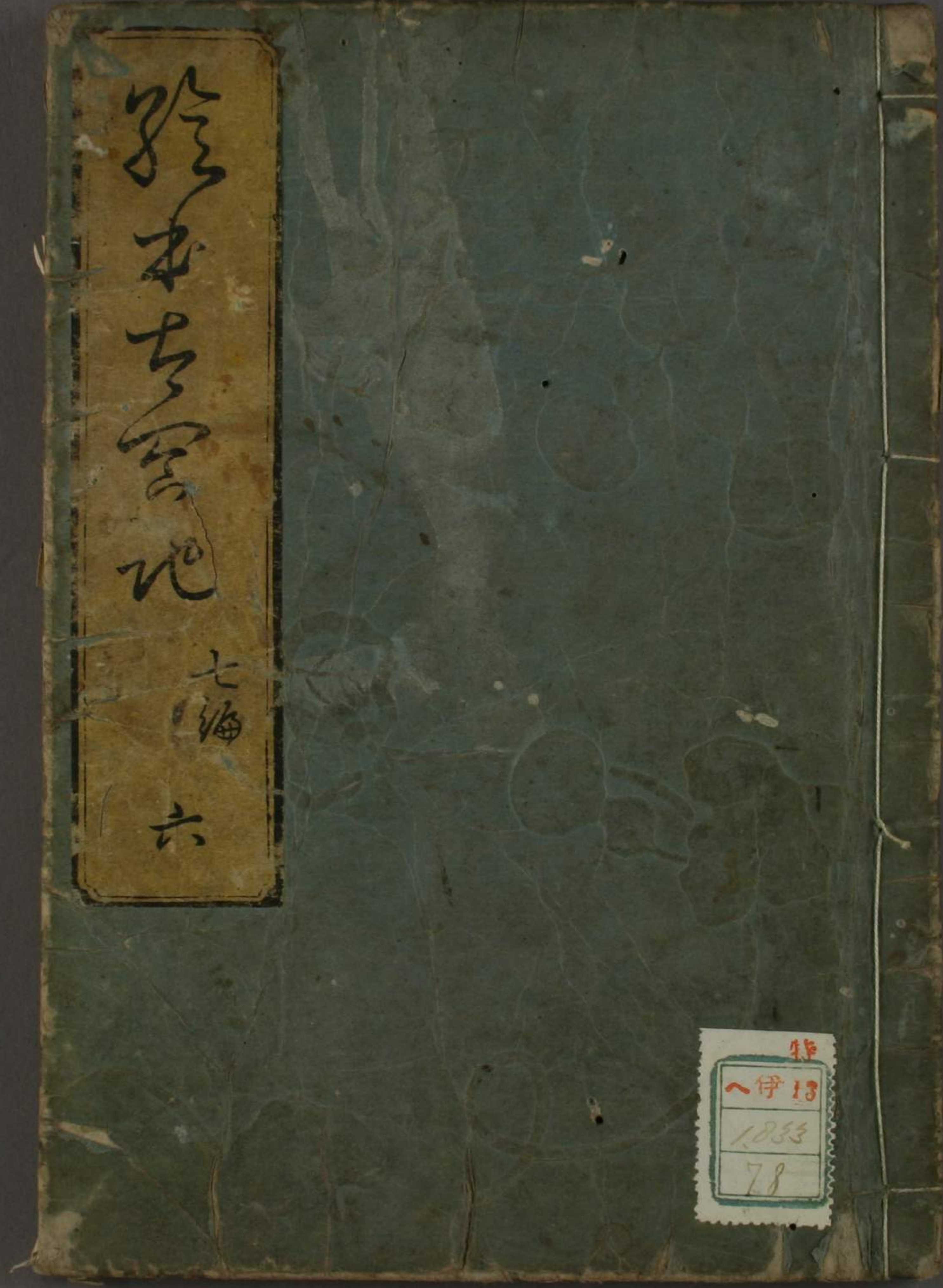




184
 1833
 78



繪本古図記七篇卷之六

目録

日本之軍兵後海朝鮮話

清心れを建て梁山の武を保るる國

朝鮮の古武妻と推つてふ林と道る國

大明之援兵散朝鮮話

石星獄と下る國

沈惟毅下獄話

清心が報書ふに及て沈惟毅多恐怖の國

真面目に古図記

揚元沈惟敬と捕る國

小西外長破元均話

朝鮮の水軍將軍元均運籌策を以て安んずる國

外長要附羅ふ令じて互同とす國

外長元均が軍船を破る國

日本勢息海陸向南原話

元均日本の擒る國

信正火王山の嶺を破る國

繪本左圖記七篇卷之六

日本之軍兵渡海朝鮮

慶長二年正月の軍大將皆領國を以て軍勢と近集り

朝鮮渡海の體に於て二月中旬より下旬の終りまで渡海

とすべきは左圖依りて外長と元均と小西外長等が

を以て朝鮮のさまを肩負ふれりあつて人々を勝とす功名を以て

計勝りとせんものと元均と外長と元均の内は渡海せんといふ急

ぐを甚し加て渡海し小西外長といふ國を以て小西が國を以て

度し小西より先とせしむるに勝るべしとて俄に軍勢と捕る二百

余艘の兵船より先より二月中旬旬暇風は帆を卷て第一番は朝鮮國

列島に満ちたる目を以て以て去る降朝の時竹崎の地は

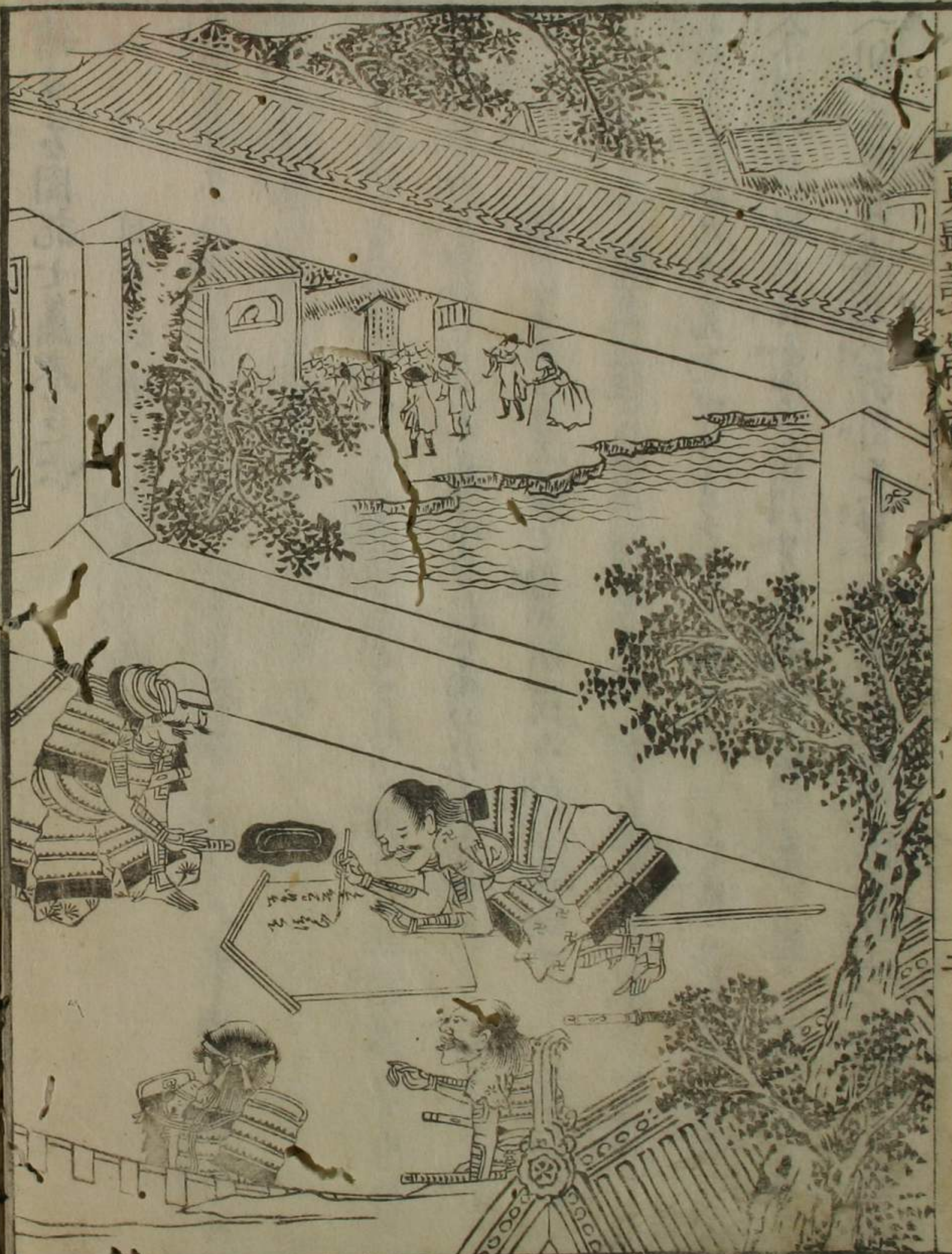
眞實に士を捕る

貞領記上巻

遠く北へ
建て
山乃
武を
保る
國



貞領記上巻



軍兵と止め置きしに、（名）が是を多し合せ、（名）機張（名）とて陣と布き、（名）本山の城は押寄に息は退落し、（名）まより西ヶ浦（名）へまゐり、（名）城を守り兵卒怒り、（名）きんぐはめと逃うせられ、（名）城に入て兵士と争ひ、（名）且れを諸方より、（名）朝鮮の人民と安んじ、（名）其言を、（名）又曰く、

日本國加ふる計、（名）既述正受を、（名）同殿下之命、（名）今再脱、（名）干朝鮮、（名）朝鮮人、（名）民必不疑、（名）牌文莫恐怖、（名）而退逃、（名）故先遣我臣、（名）令其、（名）以告焉、

朝鮮の人、（名）民是と見、（名）鬼の軍に仁義あり、（名）逃避する、（名）及じ、（名）と安堵せらる者甚多し、（名）石目より、（名）小西外長、（名）朝鮮より、（名）名刺し、（名）金山浦（名）の外より進み、（名）豆毛浦（名）より、（名）金山浦（名）の古城と修造して、（名）筑前中納言

言、（名）秋を、（名）機張と、（名）近邊の、（名）要害より、（名）多く、（名）砦を築き、（名）止る用、（名）名と、（名）朝鮮王、（名）日本勢再び、（名）金山海（名）より、（名）追々、（名）軍勢を、（名）名洋世に、（名）使て、（名）大々、（名）小落し、（名）と、（名）先年の、（名）敗軍を、（名）懲て、（名）又王の、（名）后妃を、（名）具して、（名）海州（名）へ、（名）送る、（名）と、（名）又、（名）と、（名）せ、（名）大小の、（名）臣下を、（名）悉く、（名）ら、（名）て、（名）それ、（名）を、（名）金山（名）へ、（名）送る、（名）と、（名）又、（名）と、（名）し、（名）妻子と、（名）引具、（名）遠國の、（名）知事と、（名）ら、（名）て、（名）送る、（名）と、（名）又、（名）と、（名）し、（名）我の、（名）家財と、（名）と、（名）び、（名）我の、（名）眷属と、（名）と、（名）連、（名）我の、（名）營の、（名）もの、（名）を、（名）送り、（名）わ、（名）り、（名）國家の、（名）もの、（名）を、（名）捨、（名）んと、（名）し、（名）と、（名）し、（名）者、（名）は、（名）朝鮮の、（名）國王、（名）大臣、（名）を、（名）ら、（名）ひ、（名）て、（名）送、（名）る、（名）と、（名）又、（名）と、（名）し、（名）院や、（名）佛、（名）き、（名）國、（名）百姓の、（名）東西、（名）を、（名）支、（名）り、（名）南、（名）北、（名）を、（名）と、（名）し、（名）て、（名）送、（名）る、（名）と、（名）又、（名）と、（名）し、（名）飛馬と、（名）飛、（名）して、（名）若、（名）ろ、（名）の、（名）日本、（名）の、（名）軍勢、（名）百、（名）万、（名）餘、（名）人、（名）數、（名）と、（名）ら、（名）ひ、（名）て、（名）十三、（名）列、（名）使、（名）と、（名）大明、（名）と、（名）切、（名）崩、（名）え、（名）と、（名）と、（名）の、（名）若、（名）し、（名）後、（名）海、（名）で、（名）る、（名）は、（名）安、（名）ん、（名）た、（名）り、（名）急、（名）き

山田巴



朝鮮の
妻と
山林
道
図

真言



大明之援兵救朝鮮

小大明の朝廷は群臣と集め日く和寇と退るの計哉問は
 頃年小虜乱と配し兵戈止附るうけまば諸國の兵士慕
 集り集る者も少く周をせり計あり附る大居等々
 しつる日を終りと後し再び朝鮮と犯さる石里人が朝廷に
 一日卒大と仰り已一人面と得んと帰るより事記さる石里人



石里
城
國



莫羅言
城
國

とて思ふに是一人が罪より沈惟毅人なるにぞなり

帝れて惟毅を以て罪と責めし沈惟毅元来嗚呼の若しけ

とば殺て殺うにして妻妾もろい日本再び兵をいり朝鮮王

松がれを多ふを好むが故なり殺て大明の命とてむくよわん

再び日本の陣營にあり説て兵を退けし人附は徐海楚人

臣下雖て曰く日本軍を殺るが故に殺す万海と渡るが故に里何

ぞ殺されと多ふの二つのころんや帝死して曰く沈惟毅人

罪より人より再び和兵を説て退けし其功を以て罪とゆ

るよし思ふが罪のぐるふはしとて殺て獄より終る月に月

明帝邢政を以て大將軍とて揚稿人と副將軍に封じ

麻美人と南也の將軍とて朝鮮を殺しし終る日改め令し

朝鮮王を松を新將軍と称し權應珠を命じて多の松の敵に

防せし金應瑞を以て金山浦の敵と禦せえ均人を以て松軍の敵に

はし作松加徳の敵と押へえんと軍勢をおつて其の

しりしえり水軍將軍を李希居を以て均人の西人や楊り先多日本勢

と唐海地の戦ひはもと李希居人が功名甚るくえ均人の和軍の

およりろき級軍は及び希居人を以て儒と禦し死とまぬは

和軍海軍者なりとれい晴と李希居人を以て儒と禦し死とまぬは

和り水軍將軍と附し功を李希居人にえ均人が否れは

官と別とて平率とはあつたりけし日本軍の戦加友清

小西外長を大明の援兵あるとて柳川を奉守備信と日本へ

是に西岡とあつての中を中させあはれ左岡とを配して

是に西岡とあつての中を中させあはれ左岡とを配して

是に西岡とあつての中を中させあはれ左岡とを配して

朝鮮我河を渡はし明兵を備て防ぎて先は金羅の忠信
 上の二道を行くふくくは正の長連は金羅道の軍を進
 り兵糧を乏しめどもを夷属の長く驅て大に進む力を竭して
 然く戦ひも負付配殺多うも是と顧るのみく死を畏國
 中も人々志し明國百萬の援兵あるも何の恐るも人々
 且厚田赤家も同じく宜寧晋州礼山毛利赤元密陽大
 丘より進むとて是を撃て逐く全羅道の金谷合明兵を退て
 海に引くは正の長とては正の長とては正の長とては正の長
 日本よりあり隆き戦ひをば大に怯弱を留め我其妻を斬
 しとやせやと御下知し自沈惟毅の書を送て約する朝
 鮮に道を日本へ授くる」と夷属の柳川個信悉く命を乞
 引くして朝鮮國へ送る

沈惟毅下獄

沈惟毅の明帝より勅てあり日本の兵に説て本國へ歸しむ
 ば事通ふは正の長とては正の長とては正の長とては正の長
 日本を固守するも有書訓りて約は遠く有と怒り終に沈惟
 毅を執り其方の罪状を進退するふく我多し恐るき居り
 余の論方々小加反信に書を送りてやる大の大明の大將軍邢政
 名とふ者七十余万の兵を引て朝鮮を救んと日本の小勢うて是
 又敵を得んや迷ふ兵とまゝ日本へ歸りては吾日本の
 おまけを告と書て松雲とて朝鮮の傍におせ西は浦の陣を
 一々の信を乞とて大に怒り知る書とて明兵大軍うて安んず



新編
源氏物語
卷之六



はるが
報書と
泥惟致
る
怖
王
る
図

新編
源氏物語
卷之六

る是れ我朝の兵なり朝鮮の軍兵懦弱にして日本の兵はあつた
に我朝の兵と勝つる今大明の兵と我朝の兵と戦ひては急な
難を大明の都に進め日本大軍の勢を悉く焼却し日頃の
寒くするは我朝の兵と我朝の兵と戦ひては急な
戦きつと書て返して沈惟敬人をばつ明の兵と我朝の兵と
き強き孫と我朝の兵と戦ひては急な
の太く心と心を若く再び松雲をばつ明の兵と我朝の兵と
し何事我朝の兵と戦ひては急な
又書つと書て返して沈惟敬人が御計をばつ明の兵と我朝の兵と
る沈小明の大明軍邢秋人よく沈惟敬人が表裏するつた
をばつ我朝の兵と戦ひては急な

途を失ふと見たりより獲て沈明さんと云ひたれと集る日本に
去て大明の虚実と戦ひる人は勇くは味方の難城なりとて
先沈惟敬人よく我朝の兵と戦ひては急な
沈惟敬人よく我朝の兵と戦ひては急な
すつ今却て親しき書を我朝の兵と送るは必死計こそなり
とて金山浦に立ち日本に降参せんと請うるは
大明朝鮮の軍兵多く陣しては我朝の兵と戦ひては急な
居る小邢秋人よく沈惟敬人がよく推参し揚元。吳惟忠。麻貴の元
均人よく我朝の兵と戦ひては急な
沈惟敬人よく我朝の兵と戦ひては急な
とて腹心の兵士三百余人をばつ沈惟敬人がよく我朝の兵と戦ひては急な

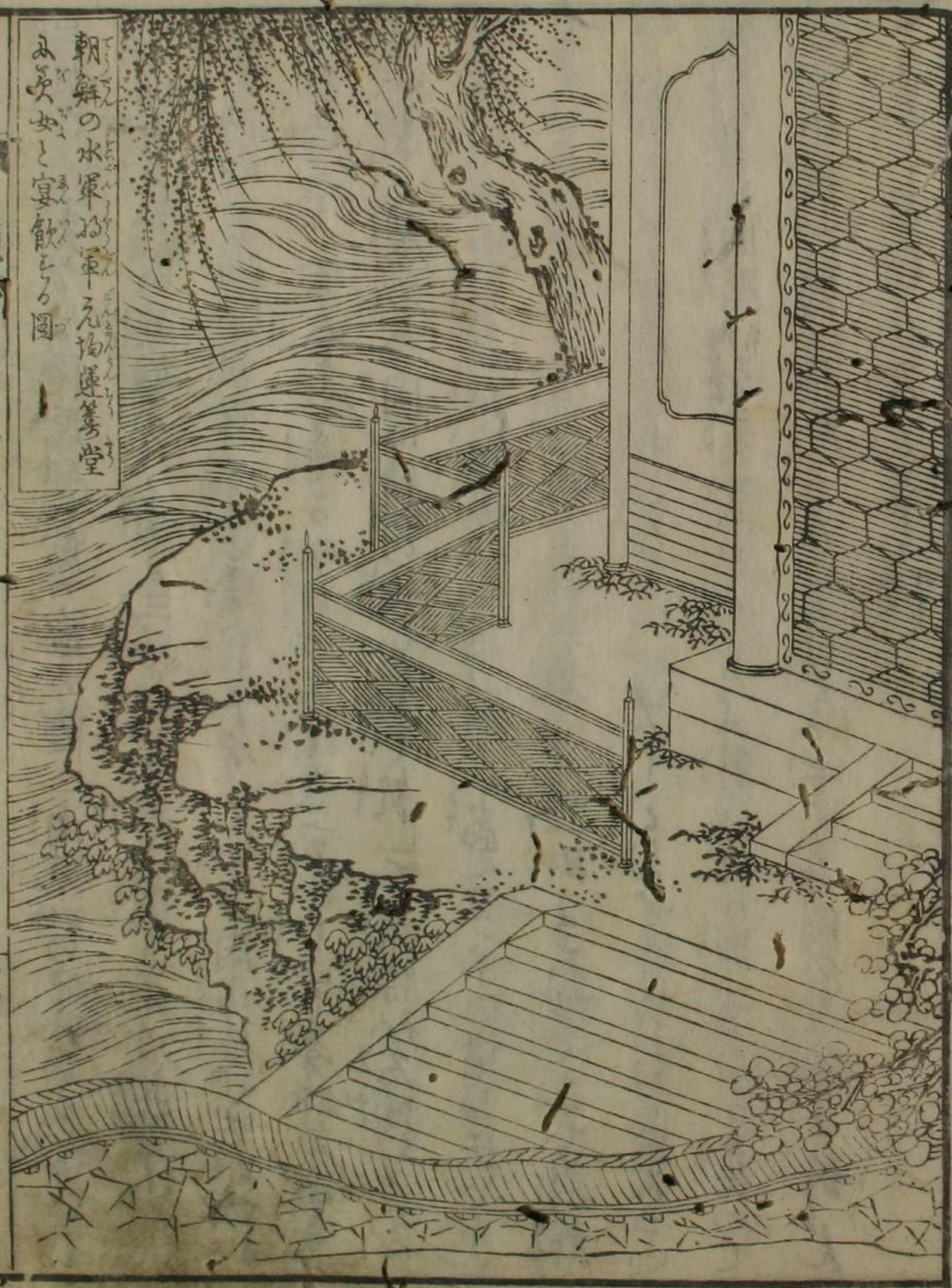


捕
名
泥
と
國
揚



真
言
卷
六

朝鮮の水軍將軍元海運籌堂
みよあまの宴飲の図



真景言七集卷六

兵隊しく美るは南原なんげんの地形ちけいなるを云
峯かみの山やまの險けんあり南なん三浪江さんろうえの源みなもとき流ながきあり其そのを金きん海かい
竹たけ海かいと通とほじ朝鮮ちょうせん第一だいいちの要害やうがいなり右みぎの方かた閑山かんざん海かいと形けい取とる
軍兵ぐんべい三さん万余よろい人ひとを身みる全州ぜんしゅうと陳ちん愚ぐ哀あい人ひとの雲うん峯かみと金きん應おう
人ひとを翼よくの閑山かんざん海かいの傍わきに軍ぐんを設しやうして推おし慄りやく人ひとを地ち人ひとを
其そのの傍わきの要害やうがいの地ち南原なんげんを援えんひのる由よし之これ日本にっぽんの諸しよ將しやう兵へいと云
て是こゝと云いふるを南原なんげんを美せる者ものなり一いつ時ときは大切たいせつと云いふて朝鮮ちょうせん
の人民じんみんをして多おほくの兵へいを有あはるにむけんと云いふるは乃すなはち長ながき不ふ
敵てきの面めん南原なんげんを美せる者ものなりと云いふるれが即すなはち諸將しよしやうを集あつめて
合戦くわせんの用もちを云いふは我われて大おほき功こうを立たすに右みぎの圖ずの計けい感かんは我われん
と勇ゆうと云いふるは乃すなはち方かたなり

今冬明の万箇二十又多あり沈惟敬人獄中又李の
 二年は二十七年秋九月眾極りて決せらる

計策を講ずるに
 兵女と最き人の入来らんを怨むて我軍をとりあはせ離れ
 制へば兵女と性な屋敷酒を執り遊樂のそと善しされ軍の
 の急めとふども建つて若くは旅りて一軍悉く服するもの
 ある云甲斐なるの將軍たる日本勢下び相来ぬ戦ひてまゐ



小西外長
要時覆々
命して返回
を
図

中ノ西ノ
船長ノ
軍艦ノ
破ノ
國ノ



元寇
日本
の
戦
場

蒙古軍の襲撃



日時、さしづむに、北なるより、大津より、安山、山崎、あり、歩し、
 義櫻、人、と、る、者、日本、勢、の、龍、の、来、り、と、ん、く、た、れ、士、卒、は、知、り、大、
 を、敵、と、陣、營、と、燒、立、軍、兵、糧、と、し、斗、死、は、積、の、せ、日本、勢、の、必、
 い、ぬ、先、は、悉、く、敵、の、た、れ、小、西、原、田、と、い、し、や、日本、の、満、大、時、安、人、及、
 こ、入、り、同、山、崎、を、奪、り、軍、威、を、示、し、北、は、難、し、ぬ、ま、の、う、り、海、
 上、の、往、來、自、由、と、得、た、れ、海、陸、と、も、進、り、南、原、と、ま、美、濃、は、
 と、其、の、勢、と、定、り、た、り、一、の、河、田、香、家、と、無、大、お、し、小、西、原、
 是、が、先、鋒、と、い、し、摩、國、勝、須、賀、長、曾、我、部、は、加、茂、馬、女、等、と、
 其、の、其、の、軍、兵、及、余、人、是、は、海、陸、より、押、向、り、と、い、し、
 秀、元、と、無、大、お、し、是、は、加、茂、長、曾、我、部、は、加、茂、馬、女、等、と、
 多、朝、野、と、い、し、や、秋、田、の、谷、山、南、

加、茂、山、に、去、る、を、い、し、東、野、は、加、茂、門、に、
 加、茂、山、に、去、る、を、い、し、東、野、は、加、茂、門、に、
 八、月、雨、降、り、其、の、勢、又、大、軍、の、加、茂、山、に、
 八、月、雨、降、り、其、の、勢、又、大、軍、の、加、茂、山、に、
 要、害、は、山、に、合、る、龍、紀、富、山、小、城、と、藤、三、を、
 人、が、軍、兵、の、つ、ら、つ、て、奪、り、た、り、小、日本、勢、の、
 是、る、者、は、大、に、知、り、た、り、大、に、知、り、た、り、大、に、知、り、
 朝、野、人、國、家、の、難、は、知、り、た、り、大、に、知、り、た、り、
 柵、を、結、ひ、通、り、本、と、い、し、款、の、よ、と、る、加、茂、山、に、
 を、奪、り、た、り、押、り、た、り、其、の、勢、と、仰、ぎ、り、た、り、
 要、害、は、山、に、合、る、龍、紀、富、山、小、城、と、藤、三、を、
 人、が、軍、兵、の、つ、ら、つ、て、奪、り、た、り、小、日本、勢、の、
 是、る、者、は、大、に、知、り、た、り、大、に、知、り、た、り、大、に、知、り、



唐王の
火王
の山
の図

隔^{とち}に^は是^{こゝ}の^{こゝ}小^こ然^こ一^つ二^に三^に日^ひを^つ費^つ所^かん^ん備^びの^の大^{おほ}換^かる^る
る^ると^とお^おと^と最^も進^{すす}む^むと^と後^{のち}軍^{ぐん}へ^へ其^{その}有^あと^と修^{しゆ}人^{じん}軍^{ぐん}兵^{へい}
と^と率^{りつ}し^しお^おま^まと^とる



繪^えを^を右^{みぎ}記^き士^し篇^{へん}卷^{くわん}上^{じやう}の^の後^{のち}

